OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	現代日本語のテ形補助動詞研究
Author(s)	李, 廷玉
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54311
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【27】

氏名	李 廷玉（イ ジョンク）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　２４０６４　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	現代日本語のテ形補助動詞研究
論文審査委員	(主査) 教　授　仁田　義雄 (副査) 教　授　小矢野哲夫　　教　授　三原　健一　　教　授　真嶋　潤子 准教授　筒井　佐代

論文内容の要旨

本論文は、「テイク」「テクル」・「テアゲル」「テクレル」の4種の日本語のテ形補助動詞を対象とした考察である。これらの補助動詞は、それぞれ本動詞「イク」「クル」・「アゲル」「クレル」から文法化の段階にある、話者からみた方向性を表すテ形補助動詞構文を構成するといった共通点を持っており、本論文ではこれらによって構成される文を、＜方向性補助動詞構文＞と一括した。なお、「テモラウ」は、＜ヴォイス＞の一種として使われるほか、使役等多様な機能を持っていることから、本論文では対象としていない。以下では、全体の流れに沿う形で、考察の内容をまとめていく。

第1章では、テ形補助動詞構文に関する先行研究の概略を示した後、本論文においての立場を示した。その際、一般動詞類と異なるテ形補助動詞固有の形態的・統語的特徴として、＜依存性＞＜代用不可＞＜文法的意味＞等を挙げた。これらの特徴から、日本語においての補助動詞構文を設定する根拠を示したことになる。しかし、こういった諸特徴はテ形補助動詞全体に通用するのではなく、補助動詞は文法化の段階において連続性をもっており、クリアカットは不可能である。また、補助動詞構文が、文法形式としての特徴と動詞としての特徴を併せ持っていることについても述べた。こうした相反する特徴を有することが、テ形補助動詞構文の本質である。

第2章では、文法化の規定を行い、テ形補助動詞構文の分析に「文法化」の視点を取りいれることの意義について述べた。考察の対象となる補助動詞は、内容語的な用法（本動詞用法）と機能語的な用法（文法形式用法・もっとも文法化の進んだ用法）とを併せ持つ。この用法間の連続性、及び有機的な関連性を捉えることが可能な、もっとも有効なアプローチとして「文法化」の概念を採用した。

第3章と第4章は「テイク」「テクル」構文、第5章は「テアゲル」「テクレル」構文の個別研究である。第3章と第4章は本来なら一つの章として取り扱うべきであるが、二章に分けての考察を進めた。なお、第3章で扱う＜主体の空間移動＞と、第4章で扱う＜心理移動・時間移動＞は、「場所名詞＋ニ格」との共起可否・前項動詞とイク・クルとの分離可能性の可否という相違がある。

第3章は、＜主体の空間移動＞を表す「テイク」「テクル」構文についての記述を行った。本動詞「行く」「来る」について述べた後、「行く」「来る」の本動詞性がもっとも残っていると思われる＜主体の空間移動＞を表す「テイク」「テクル」構文についての考察を行った。＜主体の空間移動＞も前項動詞の種類によって、＜継起＞＜付帯状態＞＜非継起＞に分けることができるが、これらの意味も＜継起＞から＜非継起＞へと連続的に捉えられる。

第4章では文法化の進んでいる＜心理移動・時間移動＞を表す「テイク」「テクル」構文についての記述を行った。＜心理移動＞とは抽象物の移動を表すため、＜対象の空間移動＞と連続的である。＜対象の空間移動・心理移動＞は、「テクル」構文のみに存在し、主にアスペクトとして扱われてきた＜時間移動＞は、両構文共に存在する。

日本語には遠心的方向を無標とする「送る、（電話を）かける」等の対象の移動を表す動詞類が存在するが、これらの動作を求心的な方向に変えるには、補助動詞「テクル」か「テクレル」の付加を必要とする。また、＜対象移動＞の＜対象＞が＜心理＞に抽象化することにより、「テクル」は＜迷惑＞の意味機能が生じる。同じく求心的方向を表す「テクレル」は＜受益＞を表すので、「テクル」構文と「テクレル」構文は相互補完的な関係であるといえる。

＜時間移動＞は、大きく＜変化の継続＞＜動作の継続＞に分けられる。特記すべき点は、＜変化の継続＞を表す前項動詞類は、＜進展性＞といった素性を必要とすることである。〔主体変化動詞〕、〔主体動作・客体変化動詞〕、〔いわゆる心理動詞〕、〔関係動詞〕なども＜進展性＞の有無により、＜時間移動＞の「テイク」「テクル」構文の成立可否が決定される。

また、第4章では、日本語の「テイク」「テクル」に対応する韓国語の「a kata ・a ota」との文法化の相違についても若干触れた。その結果、韓国語の「a kata」は「a ota」より、日本語の「テクル」の方が「テイク」

より、文法化が進んでいることが明らかとなった。

第5章、「テアゲル」「テクレル」構文では、本動詞「アゲル」「クレル」について述べた後、第3、4章同様、「テアゲル」「テクレル」構文を文法化の進展の程度に応じて記述した。その際、「人名詞＋ニ格」との共起可否、前項動詞と「アゲル」「クレル」の時間関係の成立可否をもって、＜（所有権の）空間移動＞・＜抽象物の移動＞・＜恩恵の移動＞の三種に分けた。

＜空間移動＞は、対象の空間移動のことで、「人名詞＋ニ格」との共起を可能にし、前項動詞と「アゲル」「クレル」との間には継起的な時間関係も成立する。「テアゲル」「テクレル」構文の「ニ格」は、前項動詞ではなく、「アゲル」「クレル」の要求する格であり、もっとも文法化の進んでいない類であることを示す。また、これらの類の特徴として、〔生産動詞〕についての詳しい記述を行った。対象の空間移動を文法化の初期段階として設定することは、「テアゲル」「テクレル」が、韓国語の「a patta」、及び日本語の「テワタス」「テアタエル」とは異なり、次に述べる＜抽象物の移動＞や＜恩恵の移動＞を表すことも可能であることを証左としている。

＜抽象物の移動＞は、＜空間移動＞とも繋がるが、移動の対象物の具体性に違いがある。この違いにより、前項動詞と「アゲル」「クレル」の間に時間関係は成立しない。また、前項動詞としては、〔授与〕〔伝達〕〔演奏〕に関わる動詞類が立つ傾向が強い。

＜恩恵の移動＞は、もっとも文法化の進んだ類であり、ニ格との共起不可能は当然であるが、時間関係の成立も出来ない。

最後に、第5章では「テクレル」構文の恩恵の受け手についての記述も行った。その際、評価成分との共起、後節の制約などを指摘した。その結果、「テアゲル」構文とは異なり、「テクレル」構文の恩恵の受け手は、「のかわりに」「のために」の共起、その他前項動詞で現れる格の種類に関係なく、話し手であることを明らかにした。

第6章は、今まで個別研究として取り上げてきた第3、4、5章の結論の章である。「テクル」「テクレル」構文は、ある程度まではパラレルに、文法化の度合いによる意味の変化を示すことが可能である。すなわち、＜空間移動＞においては「テクル」が＜主体＞、「テクレル」が＜対象＞を表し、＜心理移動＞においては「テクル」が＜迷惑＞、「テクレル」が＜受益＞を表すように、パラレルな関係が成立する。しかし、もっとも文法化の進んだ例においては、パラレルな対応は不可能である。すなわち、それぞれ「テクル」は＜時間移動＞、「テクレル」は＜恩恵の移動＞を表し、これらを＜抽象化された事態の移動＞として取りまとめた。第6章では、＜迷惑＞＜受益＞を相互補完的な意味機能を表していることを明白にするために、＜＋NEGATIVE＞＜＋POSITIVE＞のように表した。

また、ケーススタディーから4つの構文が、系列的関係・統語的関係を構成することから、語彙・文法カテゴリの一種であることを主張した。また直接受身文は＜直接構造＞を、間接受身文・相互文は＜間接構造＞を取ることが従来から指摘されているが、こうした事態の捉え方は＜方向性補助動詞構文＞とも関わりを持っていることについて、寺村（1982）の図を援用しながら表した。特に、＜＋NEGATIVE＞の「テクル」、＜＋POSITIVE＞の「テクレル」は、それぞれ本動詞「クル」「クレル」の文法化の過程にある意味用法であり、＜直接構造＞で示されていた事態も、新しい参画者により＜間接構造＞へと変化したことを表すことを明らかにした。こうした間接的な関わりによる影響の意味が、それぞれ＜＋NEGATIVE＞＜＋POSITIVE＞に分かれるのは、以下の要因による。すなわち、本動詞「クレル」が語彙的意味として話し手が恩恵を受けることを表すことから、「テクレル」も話し手に対する＜受益＞、つまり＜＋POSITIVE＞を表す。その結果、「クル」は本来は語彙的意味として求心的な移動を表すが、「テクル」は「テクレル」と相補的な意味をなすことから＜迷惑＞、すなわち＜＋NEGATIVE＞を表すためである。なお、「テアゲル」構文は、格の数の増減といった統語的な特徴により、＜直接構造＞・＜間接構造＞、両方の捉え方が可能である。

方向性補助動詞構文「テイク」「テクル」・「テアゲル」「テクレル」は、文法カテゴリとしての弱さを持ちつつも、語彙・文法カテゴリの一種としての可能性のある構文である。全体的に煩雑に見える可能性はあるがそれこそが補助動詞の本質である。

方向性を新たにカテゴリの一種としようとした試みは、今まで限られた

文法カテゴリのみを認めた認識からすると、文法カテゴリの拡がりを見せることができたと考えられる。

また、文法化から見えてきたテ形補助動詞構文の連続性については、本動詞と文法形式の両方の特徴を有する補助動詞構文のあり方を平面的に記述することにとどまらず、本動詞から文法形式への連続体として立体的に示すことが出来た。

そして、テ形補助動詞構文に関する中心的な考察ではないが、＜直接構造＞＜間接構造＞といった、事態の捉え方のあり方が、受身文・相互文のみならず、「テクル」「テクレル」「テアゲル」構文とも関わりを持っており、事態の捉え方と構文の帯びる意味機能が相関することについても明らかにした。

論文審査の結果の要旨

『現代日本語のテ形補助動詞研究』と題された本博士論文は，いわゆる補助動詞といわれるものを持つ構文について，記述的かつ組織的に考察することを目指したものである。取り扱われている補助動詞は，「テイク」「テクル」と「テアゲル」「テクレル」の類である。

「テイク」「テクル」やヤリモライという補助動詞やそれらを含む構文についての考察は，従来からも決して少なくはない。ただ，その考察の中心は，それぞれの補助動詞の意味・用法やたかだか関係する補助動詞群の中でそれぞれの補助動詞を相互に関連づけて分析・記述するという点止まりであった。未だ文全体の意味に対してどのようなタイプ・種類の文法的な意味を付与するのか，という点に対しては，ほとんど言及のない状態であった。それに対して，本論文は，これら「テイク」「テクル」「テアゲル」「テクレル」を，＜方向性補助動詞構文＞として一括し，文法カテゴリとしての成熟度は低いながらも，語彙-文法カテゴリとして定立・設定できる可能性を指摘し，その方向での分析を行っている。

まず，本論文の新しさ・評価すべき点としては，方向性という，その存在に脆弱さがあり成熟度の低い語彙-文法カテゴリを抽出する，という意欲的な試みが上げられる。さらに，テアゲル・テクレル構文に対しては，直接構造・間接構造といった構造の観点からの捉え直しを試みている。

さらに評価すべき点としては，分析・記述の方法・姿勢が挙げられる。静的な分析・記述に終わらないよう，また，単純化した分析・記述をしてしまわないよう，動態的アプローチでもって，現象をきめ細かく分析・記述している。その一例として，文法化という観点を援用しながら，補助動詞が有している本動詞性と助動詞性を連続的に捉え，その補助動詞の意味を両者の有機的関連性の元に捉えようとしていることが挙げられる。言い換えれば，「テイク／テクル」「テアゲル／テクレル」構文の全体像を捉えるために，「テイク／テクル」「テアゲル／テクレル」構文のそれぞれの意味・用法を連続的に捉えることの必要性を指摘している。たとえば，＜主体の空間移動＞といったタイプに属する下位種である＜継起＞と＜付帯状況＞についても，「彼女はドレスを着てきた」は付帯状況で解釈されるが，「彼女は{楽屋で／あわただしく}ドレスを着てきた」のように，前項動詞の表す動作の実現場所や動作様態を取りうることによって，継起への解釈が優先されることを指摘している。その結果，連続しながら変わっていく様子が，きめ細かく捉えられている。たとえば，「僕の所にお米を送ってきた」は，元の動詞が移動を表し，典型的な＜対象の空間移動＞を示すものであるが，「僕に手紙を書いてきた」「私たちにその件について断ってきた」のように，元の動詞が移動の意味を持たないものも，「テクル」が使え，＜対象の空間移動＞から事態の＜心理的移動＞へとつながっていくことを示している。さらに，日本語の動詞は，遠心性が無標であり，そのことによって，有標の求心性を表す「テクル」「テクレル」の文法化が，「テイク」「テアゲル」に比べて進んでいることを明らかにしている。そのことの一つの文法的証左が，対象だけでなく主体も移動する場合では，「送ッテイク」も「送ッテクル」も可能であるが，対象の空間移動では，「送ッテクル」は可能だが，「送ッテイク」は使えず「送ル」になり，「送ッテイク」が使えるのは多回的な場合のみである，という現象である。本論文は，このことを明るみに出している。

また，本論文の評価すべき点として，意味・用法のタイプをなるたけ客観的に取り出すよう試みていることが挙げられる。たとえば，文法化の段階を表す形態・統語的特徴として，1)「テイク／テクル」「テアゲル／テクレル」と前項動詞の分離可能性，2)人名詞着点ニ格の共起可否などを挙げ，さらに「テイク／テクル」「テアゲル／テクレル」の格付与能力などの異なりをも考慮しながら，各形式の意味・用法のタイプを取り出している。

その結果，本論文には，鋭い観察・従来言われていなかった指摘が見られる。たとえば，「異なってくる」のような＜関係を表す動詞＞にアスペクト的用法を表す「テクル」が付く例についての指摘は，従来のアスペクト形式としての「テクル」の研究が気づかず考えなかったことで興味深い指摘である。また，心理動詞について，動詞によって生じる心理状態に深まりのあるものと無いものとがあることを指摘している。これなども丹念な観察の結果であろう。

ただ，補助動詞構文という領域に対しては，既にいろいろな研究の蓄積があり，現象観察という点では，やはり先行研究の成果にかなりの点で依存している。

しかしながら，上記のような問題点が存するにしても，本研究の目的は十分達せられており，今後に残された問題が存することは，研究の宿命であり，本論文の価値を損なうほどのものではない。

これらのことを総合的に判断し，本審査委員会は，本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。